

「幼児の内的世界を探る」(2)

- マッカーサーのストーリー・STEMバッテリーを用いて -

澤田瑞也 渋谷美智 中植満美子

研究の目的

本研究は、研究(1)に引き続き、3歳あたりの子どものナラティブ能力について、子どものつくり出したストーリーを分析することにより、子どもの表現にあらわれる内的世界や内的感情について考察することを目的とするものである。本研究では、次の点を検討する。

- ① 子どものナラティブは何歳位から可能になるか。また子どもの年齢によってどのような違いが見られるか。
- ② 子どものナラティブに、子どものどのような願望や心の葛藤、不安が投影されているか。
- ③ 子どものナラティブを分析する方法として、今回我々が想定した方法はどれ程妥当か。

方法

2歳台から5歳台の子どもたちを対象に、親人形(母親と父親、祖父母)、子ども人形(複数)と状況設定の補助となる用具を与え、それらを自由に演技させ、また発言させることで、子どものナラティブを引き出す。

分析内容

○ストーリーを語る困難さ

反応なし、演技のみ(無言)、単語のみ、一文のみ。

○ストーリーの中の反応の分類

1. 生活の中のあいさつ言葉

「おはよう」「いただきます」「ごちそうさま」「バイバイ」「ごめんね」「ありがとう」

2. 愛情をあらわす言葉(友好的関係)

「好き」「いっしょに」「なかよし」、慰め、はげまし

3. 拒否、または肯定する言葉

「だめ」「いや」「○○しない」「入れてあげない」「いいよ」「そうしよう」

4. 争いと攻撃

競争、言い争い、ものの取り合い、争いの解決、叩く、押す

5. 安心と不安・心配をあらわす言葉・表情

○ストーリーの最初と最後の反応

1. 最初の反応

- ① 親に援助を求める - 不安を意味する
- ② 親と離れることの拒否
- ③ 攻撃性(対子ども、対親)
- ④ 自分で問題を解決

2. 最後の反応

ストーリーを肯定的、中立的、否定的(恐れ、怒り、攻撃性)に終わるか。否定的に終わることは不安を予測。とくに攻撃的に終わることは外在化障害を示唆。

次にどのような感情でストーリーを終えるか検討する。(子どもの表情も参考にする)。ストーリーの最終内容に焦点をあてる。

○感情の一貫性

1. 感情の転換が首尾一貫しており理解できる。
2. ストーリーの中の感情が突然説明なしに転換が生じる。たとえば、ある子が他の子と争っており、次に突然その子と仲良しになるとしたら、それは感情の一貫性のなさと考えられる。このようなケースは親から異常に扱われてきた子に多いようである。攻撃性から肯定的内容への一貫性のない転換は外在化障害の症候の1指標とも考えられる。

3. ネガティブな状況での不一致な感情-たとえば笑い。
4. 妨げられた願望やゴールでの反応-子どもが自分の願望をすぐに、またはたやすく満たせない状況での反応を記述する。可能な反応としては、①それを受け入れること、②親と論争すること、③親がとめても自分がしたいことをする。

○ストーリーの中で子ども人形と親人形をどのように表象するか。

1. 子ども人形を自分、兄弟、または友だちとして見なすかどうか。
2. 関わり方としては、ポジティブなかかわり〜一緒に親しく遊ぶ、遊びにさそう、相手を慰める、はげますなど

○プロンプト（口添え）

・ウォームアップストーリーと終わりのストーリーの間のプロンプト/デモンストレーションに関して異なるルールがある。

・ウォームアップの目的は子どもに「ふりをさせる」ことで、人形を動かし、人形に話しかけることである。そのため、インタヴューアは家族人形に話しかけ、彼らの行動を演じるのを実演する（もし子どもが自発的にそうしなければ）。終わりのストーリーの目的は子どもに彼が望むことをする自由を与えることである。

・ウォームアップの終りまでに、子どもは次の行動を行ったはずである。

1. インタヴューアと話す
2. 人形とプロップを操作する
3. 人物を通して話す
4. バースディ・ストーリーに関連する何かを述べる

ネガティブなかかわり〜言い争う、物を奪い取る、拒否、悪口を言う、非難するなど

○本研究で採用したストーリー・ステムー2、3歳の子どもの考慮

・ウォームアップとして誕生日パーティ

- (1) こぼれたジュース
- (2) 母親の頭痛
- (3) 熱い肉汁
- (4) 岩登り

・終わり：家族の楽しみ

2. 親人形を親としてみなすかどうか。ストーリーの中で親の役割を想定する。たとえば子どもに命令する、愛情をそそぐ、子どもの問題を解決する、困難な状況を処理する、子どもが親に反抗するなど

結果

調査時期)平成26年8月～平成27年5月
被験者)2歳2か月から5歳0か月までの幼児6名

Aちゃん (女児,2歳2か月)一人っ子。普段からあまり言葉が出ない。

Bくん (男児,2歳4か月)一人っ子。言葉の発達がゆっくりである。

Cちゃん (女児,2歳9か月)兄と二人。普段から人形遊びでセリフを用いる。

Dくん (男児,3歳9か月)一人っ子。

Eちゃん (女児,4歳2か月)弟と二人。

Fちゃん (女児,5歳0か月)一人っ子。

調査場所)複数の大学の子育て支援活動の会場

調査者 (I) の発言 < >

子どもの発言「 > 」

母親 (Mo) の発言『 > 』

○ウォームアップ：誕生日パーティ

ストーリーのテーマ：導入、家族人形とのナレーションのモデリング

小道具：テーブル、誕生日ケーキ

登場人物：全ての家族人形、犬を含む（友人や家族以外の人形はいない）

Mo(母)：『おばあちゃん、おとうさん、○○ちゃん、はやくきて、○○ちゃんのお誕生日を祝う時間ですよ。』

I (調査者) : <家族のみんなをテーブルのところに連れてきてくれますか?お願いします。>
Aちゃん (2歳2か月) の場合) 母親人形を観て、指さし、Moの手を握る。「まーま」と言い、Moの顔を見る。人形やケーキには目を向けるが、遊びに乗れず、カメラを気にしている。最終的にMoの手を引っ張って、指をくわえ、抱っこを求めた。続行難しく調査は中断する。

Bくん (2歳4か月) の場合)

人形の名前: けんじくん

「ママあ〜!」Moの手をBくんが持って動かして、Moに演技させようとしている。

Bくん、ケーキを食べるふりをする。「もぐもぐ」I<もぐもぐ。おいしそうだねえ。>

Bくん「ママいる。」Moを見ている。「ママア」とMoの手を取る。「ママ、はい。ママ、あのきいろいの」I<あ、ママにも食べてもらおうねえ。パパは?パパケーキ食べる?>Bくん、Moの手をとり、Moに父親人形の操作をさせようとする。人形を椅子の上に座らせようとするがバランスが悪く、なかなか人形がのらない。何度も何度も人形がひっくり返ってしまう。Bくん、笑い声をたて、「いたい、いたい」という。I<ほんまやなあ> Bくん、「ママあ〜」舌を出す。I<じゃあ、けんじくん、ろうそくを、どうするんだろう・・・食べる前に、ろうそくの火をどうするのかな?>

Bくん「へへへへ〜・・・いや!」その後Moと一緒に、ろうそくの火を消す真似をするが、Bくんは、それでも一緒に吹き消そうとしなかった。

Cちゃん (2歳9か月) の場合)

人形の名前: キティちゃん

祖父母の同席について確認していると、Cちゃんより「○○○と×××」と、祖父母の本名が告げられた。Iより人形の説明を受けると、「これがキティちゃん、これがキティちゃんのお兄ちゃん」と口に出して確認していた。C

ちゃん、ケーキを見るなり、「ふーっ」と息をふきかける仕草をした。テーブルの所に人形を置くように指示を出すと、人形やアイテムを手に取り、「ここ?ここ?」と大人に確認しながらおいていく。「お母さんこれ」「じいじ、こっち」「お兄ちゃんこっち」と発話が多い。みんなが揃ったので、<キティちゃんお誕生日おめでとう>と拍手をするが、もうすでにケーキの火は吹き消したからか同じアクションが出ない。<火がついているよ>と声掛けすると、「火がついている」と確認をして、大人の顔色を見て、Cちゃん「ふーっ」と火を吹き消した。

Dくん (3歳9か月) の場合)

人形の名前: かつぱちゃん

ケーキの上のいちごが気になるようで手にとって見ていた。I<皆を、ケーキのところに、連れて来てくれるかな?椅子に座らせてあげて>Dくん、さっと人形を手に取り、一体一体、テーブルの周りに慎重に人形を座らせる。

I<じゃあ、かつぱちゃん、ケーキを、ろうそくを、どうするんだろう>Dくん「ふーっ」と息で吹き消す。I<よくできました〜>

Eちゃん (4歳2か月) の場合)

人形の名前: えりちゃん

興味を持っておもちゃを眺めており、引き寄せて触っている。自分役のえりちゃん人形をにぎる。I<皆を、ケーキのところに、連れて来てくれるかな?>Eちゃん、椅子をとってならべている。Mo『じいじとばあばを座らせてあげようか』Eちゃん「あったかい・・・」といい、ピロートのついた椅子に父親人形を座らせようとした。その後、母親人形、弟人形の順に座らせた。お誕生日の歌を歌ってもらい、嬉しそう。Moに促され、小さいケーキを一つ一つ人形の前に並べ、「これはばあばの」と説明する。

Fちゃん (5歳0か月) の場合)

人形の名前: まゆちゃん

Iが今からすることを説明すると、「はい」とお行儀よく座って応じてくれる。にこにこしている。Iに「皆を、ケーキのところに、連れて来てくれるかな?」と言われると、人形を並べていく。椅子に座りにくいポーズの人形は椅子の隣に立たせて、不自然ではない感じにしている。I「これからどうするかな?」という、Fちゃん「ありがとうっていう。」I、ケーキに火をつける真似をすると、人形をとって、人形に、「ふーっ」と火を消させる真似をさせていた。

1. こぼれたジュース

テーマ： アクシデントへの親的反応

小道具： テーブルとピッチャー

人物、両親と二人の子ども

I: <おばあちゃんは帰りました。皆がここにあります。〇〇ちゃんは、ジュースを飲もうとして、ひっくりかえしちゃう。:みんなは、のどが渴いていて、ジュースを飲んでるんだけどね、〇〇ちゃんが、ジュースがのみたいなあ、と思っただらね、パタンって、これがこぼれちゃった。ざばーんって。ジュースがこぼれちゃったねえ。〇〇ちゃん、どうするかな?>

Aちゃんの場合) ウォームアップで中断。

Bくんの場合) 人形など、小道具に興味津々だった。Iの話をとっても興味深げに聞き入って、顔をじーっとみつめていたが、ジュースがひっくりかえった瞬間にBくん表情が固まってしまって、後ずさってMoに、くっついてしまう。口に指をくわえてしまった。不安が高じているような表情。I「けんじくんだったら、あ〜!って、かんじかな?」反応がないので、I「こぼれたジュースはMoに片づけてもらいましょう。はい、ないない、綺麗になりました。よかったねえ。もう大丈夫だよ>

Cちゃんの場合) 小道具を覗きこんでは、鼻を触っている。ジュースがこぼれた状況を見て、その後Moの顔をみて、考え込んでいる。悩んでいる様子。Moに『どうする?』と言われると、Cちゃん「むずかしい・・・」と答える。Iが、拭くもの(ティッシュ)を見せると、「Cちゃんもふける」と、キティちゃん人形をまず拭いて、その後、全ての人形の顔をふいてまわる仕草がみられた。

Dくんの場合) Dくん、Moの顔を見ながら、「ふきふき、ふきふきする」という。I「そうだねえ!」とティッシュを渡すと、テーブルを拭く真似をした。I「かっぱちゃん、ありがとう。」>

Eちゃんの場合) 自発的にポットからお茶碗にジュースをついでいってくれた。ジュースがこぼれてしまうと聞くと、(何かないかな・・・?)と何かを探すような仕草をする。スポンジのような形のもを渡すと、Eちゃんはそれでジュースをふきとっていた。言葉は無し。

Fちゃんの場合) セッティングされるのを覗きこんでみており、指示を待っている様子。ジュースをコップにつぎ、こぼれてしまった、という設定を伝えると、「・・・で」と、ティッシュを取り、テーブルを拭いていた。

2. お母さんの頭痛

物語のテーマ： お母さんへの共感対友人への忠誠のジレンマ

小道具： ソファ、テレビ、肘掛け椅子

人物： 母、子ども二人

I: (ソファとテレビと肘掛け椅子を下記のように準備する。それを配置しながら、家具の名称を告げる。) <ソファと、テレビと、肘掛け椅子があります>ここで表現されているセッ

トアップは友達がドアベルをならした時の様子を表している。

I: <お母さんと〇〇ちゃんは座ってテレビを観ている所です(お母さんは子どもの方を向きます)読んでいただいてもいいですか?>

Mo: 『あら、〇〇ちゃん、お母さんは頭がいたいのでテレビを消して、おねんねしないといけません。』(Moは立ち上がってテレビを消します、) Mo: 『〇〇ちゃん、しばらく、何か静かにして遊べるかな?』

C1(子どもさん役のI): <いいよ、ママ、本をよむよ。(Moはソファに横になり、子どもは肘掛け椅子に座ったまま本を読みます)> I: <(ピンポン! ドアベルの音をたてる)友達のたろうくんです。>

C3(おともだち役のI): 「テレビで今面白いのやってるよ、はいつて一緒にみてもいい?」

Aちゃんの場合) 中断のため実施せず。

Bくんの場合) しばらくIの顔を見つめて、「・・・いやあ!」といて、笑う。

C3(おともだち役のI): <いやかあ。妖怪ウォッチ面白いんだけどな、観たらだめか、観たらだめ?> Bくん「いやあ!」といい、満面の笑み。I<そうか、嫌か。じゃあ、帰るよ。ばいば〜い> I<ママ、ねんねできてよかったねえ、ママねんねできてよかった。>

Cちゃんの場合) セッティング中に自分の人形を手にとる。ミニチュアの本が気に入り、それを開いて人形と一緒に本を読んでいる。おともだち役のIに<一緒に観てもいい?>と言われ、Cちゃん「いいよ!」と答える。Moが、『頭が痛いよ』という、Cちゃん、「えーっ?」と驚いた声を出す。I<Cちゃん、どうしようか?>と尋ねると、Cちゃん「じゃあ、本を読んであげる。本を読んであげる」という。お友達役のIが、<じゃあいいや、帰るね、バ

イバイ>という、Cちゃん、「本を読んであげる、どこ読む?」と本に興味深々でそこから離れられなかった。初めは、Moに対しての発言だと思っていたが、実は、お友達に本を読んでもあげたかったんだとI、後で認識した。

Dくんの場合) Dくん、ミニチュアの本をじっとみている。I<(ピンポン! ドアベルの音をたてる)かっぱちゃんの友達のたろうくんです。> C3(おともだち役のI): <テレビでいま、面白いのやってるよ、はいつて一緒にみてもいい?> Dくん、「いいよ!」と即答。大きくうなづく。<ありがとう。> Mo, 再度『頭が痛いよ、寝たいのよ』という。すると、Dくん、少し困った表情になり、Moの顔をじっとみて、自分の持っているミニチュアの本をMoに渡して、TVの前のお友達と遊ぶとする。Mo『そうきたか・・・静かにしてください〜い』と再び注意すると、Dくん、友達人形にいきなりパンチ。IとMoがDくんのいきなりの行動に驚いていると、Dくんペロンと舌を出して笑っていた。

Eちゃんの場合) 小道具のおもちゃをじっとみている。ママ人形をみて、「ねてる。」という。Eちゃん、小道具のテレビのをいじっている。Iの指示にじっと耳を傾けて、本を手取る。I<(ピンポン! ドアベルの音をたてる)えりちゃんの友達のたろうくんです。> C3(おともだち役のI): 「テレビでいま、面白いのやってるよ、はいつて一緒にみてもいい?」Eちゃん首をかしげるとまどう。<いい?>と再度尋ねると、笑顔を見せ、再び困った顔をしてMoの顔を見て、「だめ」という。<どうして?>と尋ねると、「ママが寝てるからダメ」と理由も言えた。Iがたろうくん人形を帰らせると、Moが「頭いたいよ治ったよ」という、Eちゃん、嬉しそうに微笑む

Fちゃんの場合) 寝ているMo人形を見て笑う。まゆちゃん人形を椅子に座らせて、人形に本の

ページが見えるように配置し、本を読ませている。I<(ピンポン! ドアベルの音をたてる) まゆちゃんの友達のたろうくんです。>C3 (おともだち役のI):「テレビでいま、面白いのやってるよ、入って一緒に観てもいい?」Fちゃん、Moの顔を見て、首をふり、「あかん」という。理由は言わない。たろうくん人形がくバイバイ>という、Fちゃんも人形を使って、「ばいばい」と言っていた。

3. 熱い肉汁

物語のテーマ: 不服従/親としての共感 対 権威

小道具: オープン (コンロ) とお鍋

人物: 母、父、子ども

I:<ママと〇〇ちゃんはコンロのそばにいます。お父さんはテーブルの席についています。>

Mo:『これからおいしい晩御飯を食べるんだけど、まだ準備ができていないのよ。コンロの近くに来てはだめよ』

C1 (お子さん役のI):<う〜ん、おいしそう〜。もうまてない、ちょっとちょうだい><〇〇ちゃんはコンロの上から、スープ鍋をひっくりかえします>

C1 (お子さん役のI):<ああ!手をやけどしちゃった!いたいよう>

I:<このあとどうなるでしょうか、教えてください。>

Aちゃんの場合) 中断のため、実施せず。

Bくんの場合) Bくん、小道具の入れ替えになると俄然積極的になって片づけ等に参加してくれるのだが、人形遊びになると、急に「いや」を連発する。Bくん、一瞬調査者の顔を見つめて、「いやあ!」I<いや、いやか、あつかったなあ。やけどしちゃった。おててをみんなはどうするの?>Bくん、「いやあ!」 I<いやか

> I<ママ、ママどうする?>Bくん「いや」と笑顔。I<ママどうするかな?>Bくん「いやあ」と笑顔。I<じゃあ、ママが片づけます。じゃあ、ちょっと冷やしたほうがいいですよ。じゃあ、ちょっと冷やしましょう。よかったね、よかったあ。>

Cちゃんの場合) キッチンセットの小道具をみて、食べ物を連想したようで「おやつ食べたい・・・」という。やけどの設定を聞いた後も、床に落ちた鍋とお肉を拾うのに一生懸命。I<やけどしちゃったよ、どうする?>という、台所でお鍋にお水をくんで冷やす。スポンジのようなものをみて、「これいらぬ」という。

Dくんの場合) Dくん、お母さんの顔を見たり、場面を交互に見て、口をあけて笑っている。言葉は出ない。I<やけどしちゃったよう。お手をみんなはどうするの?>Dくん、無言で、小さいスポンジをとって、人形の手にあてる。I<あ、冷やしているね。よかったね、よかったあ。これでもう大丈夫だね>

Eちゃんの場合) 台所の小道具を嬉しそうに触り、人形を指さし、「パパ」「パパ、はい、立っとくー」「これはなあ、ここにおく」など、設定を楽しんでいる。Faは椅子に座らせ、Moの横にえりちゃん人形を置く。お鍋がひっくりかえると、心配そうに覗きこむ。<手をやけどしちゃったなあ。どうする?>と尋ねると、Eちゃん「ひやす」といい、お鍋に水を入れて、クッションを取る。水を入れたお鍋を手にあてて、冷やしている。Moに、『偉いな、しつとったん?そんなの?』と言われる。

Fちゃんの場合) 台所の小道具に興味を示し、Moの表情と両方をしっかりと見ている。お鍋がひっくりかえると、まじまじと人形を見つめる。I<いたいよー>という、すぐに水道にまゆちゃん人形を持って行って、水道で直接人

形の手を冷やしていた。Moに『えらいねえ。』と言われるが、Fちゃんの表情はクールで、ほめられた喜びなどは顔に出ない。

4. 岩のぼり

物語のテーマ： 有能感・上手にできるという
感覚／自尊心

小道具：岩（スポンジ、岩のように見せかけて
カットしたもの） 公園をあらわしている、大
きい目の緑色のフェルトの布

人物： 母、父、子ども

I:<今日は、家族はみんなで公園にいきます(家
族を公園の近くに近づける。)公園だ、公園だ
ねえ。>

C1(お子さん役のI) :<みて！おおきな岩、
みて！てっぺんまでのぼるよ！>

Mo:『え、ほんとに？気を付けてね！』(やや
驚いた声で)

I:<このあとどうなるでしょうか、○○ちゃん、
てっぺんに上るかな。>

Aちゃんの場合) 中断のため実施せず

Bくんの場合) Bくん、小道具に大喜びして、
歓声をあげる。並べる作業をととても喜んで
いた。しかし人形遊びに入ると、一瞬の間の
後で、「いやあ」といって、挑戦的ににやり
とする。

I<登らない、登らないか。>Bくん「いやあ」
I<そっか、登らないか。>Bくん「こっち。」
I<じゃ、けんじくんは、公園で何を
してあそぶかな？>他の事にIが
気を取られている瞬間に、Bくん、
一瞬自分で岩登りをして、人形を
岩の上におくが、おっこちてしまい、
「ど～ん！」I<あ、登ったねえ、
今。落っこちたねえ>

Bくん、笑っている。Bくん、「はい」と
いい、片づけを手伝ってくれる。「い
しも。」I<はい、これも片づけよう
ね>

Cちゃんの場合) 公園の小道具を見て目を輝
かせ、「これ、こっちにおいて」とリク
エスト。

「これはここ」と、セッティングに積
極的に関わってくれる。嬉しいよう
で、時々甲高い歓声を上げる。花壇
がお気に入り、花壇の上に人形を置
いて遊んでいる。岩登りの課題を伝
えられ、Moに『登りたい？』と尋ね
られると、Cちゃん「のぼりたい」と
答え、Moが『本当に？』と確認する
間に岩にさっとキティちゃん人形を
登らせていた。Mo『気をつけてねー』
Cちゃん、「パパものぼってみてー」
「ママものぼれる」と、両親を登
らせたが、兄人形は使用せず。

Dくんの場合) Dくん、自分自身で、
身体を後ろにのけぞらせて、「落ちる」
という。その後、人形を持って、途
中まで持っていくが、落として、「の
ぼれない」という。I<あ、かっぱ
ちゃん、登れないか、そうか>I
がそう言って、Dくんから注意が
それた瞬間、Dくん、人形を手
にして、一瞬で岩登りをした。I<あ
、かっぱちゃん、のぼったねえ>
Dくん、笑っている。片づける
時に、Dくん再度、岩を取り、頭
上に掲げる。次の設定が始まると
Iに岩を手渡す。

Eちゃんの場合) 小道具の設定の時
から自分で並べたがり、にこにこ
しながらベンチからまず置いてお
く、「なんかちがう」「これはどこ
に？」とおしゃべりしながら次々
に置いていく。人形もその後並べ
るが、家族として使用していな
かった人形が混ざっていたのに気
が付いて、「ちがう」と、カゴに
戻っていた。ばあばとじいじを
公園に連れて行く、という設定
が出来る。

Iがお題を告げた後、弟人形を持
って、<(岩に)登れるよ！>と姉を
誘ったつもりが、Moからの『気
を付けてね』の声掛けがあった途
端に、弟人形に向かって、Eちゃん
「だめ！」という「だめ！あぶ
ないからだめ。おちるかもしれない
からだめ。ぶらんことか、すべ
りだいであそんでいいから、そ
っちであそんでかえりなさい」と
言う。Mo『助かったー。』

Fちゃんの場合) 公園セットとお題の書いてあるフリップをじっと見つめている。小道具のカゴの方もみている。設定が始まると、花が好きなので、花の鉢植えを並べる。岩登りのお題が告げられるが、Moに『気を付けてね』といわれると、Fちゃん、「わかんない」という。Moの顔色を見る。Moに『どうする?』と言われると、きょろきょろとして、「わかんない」と困ったような表情になった。I<じゃあ、まゆちゃんが一番いいところに連れて行って!いちばん行きたいところ!>という、じっとセットを見つめて、ピンクのベンチを指さした。ベンチにまゆちゃん人形を置いて、その後両親を置き、ベンチの周りにたくさん並んだお花を家族3人で見ているところが完成した。I<お花見だね>

○終わり：家族の楽しみ

物語のテーマ： 家族の楽しみ

小道具 子どもに、どの小道具でも人形でも、好きなものを選んでよいとすすめる
人物、両親、祖母、子ども、犬

I：<家族でお家にいるところです>

Mo：(お父さんに、嬉しそうに)『今日はお休みだから、皆で一緒に何かしましょうよ』

Fa(父役のI)：<そうだね、家族皆が楽しめる何かをしよう>(子どもの方に向き合う)

両親：『今日は何がしたい?○○ちゃんは何がしたいかな?』

Aちゃんの場合) 中断のため、実施せず

Bくんの場合) Bくん、お約束のように、「・・・いやあ」。とって笑う。I<何もしたくないか~>Bくん「いやあ。」にやあっと笑っている。I<このあとどうなったのでしょうか、教えてください。どっか行く?>Bくん「いやあ。」I<いやか、おうちにいる?>Bくん「いやあ。」何を訊いても、この返答しか得られない感じ。I

<嫌か。嫌にはまっちゃったね、いやいやばかりやな~>片づけようとしていると、Bくん、「これ」といって片づけを手伝ってくれた。I<ありがとう。じゃあ、ばいば~いってゆって、片づけてもらっていいかな?>

Cちゃんの場合) もう終了かと思ったCちゃん、「ありがとうございました?」と聞いてきた。家族皆で何をしたいか尋ねると、「ごはんをたべたい」とのこと。すぐにテーブルを設定して、皆でごはんを食べるおままごと。父親人形を使ってCちゃん「ただいま」「かぼちゃだー」「ちよっとまってー」「おちてるー」「いただきます」と上手におままごとをしていた。

Dくんの場合) Dくん「車でドライブに行きたい」I<そうか、ドライブかあ、じゃあ、これを車に見立てて・・・>Iはテーブルをひっくり返し、人形を車の座席に座らせるように、裏返しになったテーブルの板の上に並べ、<それでは、これから、ドライブに行きます。かっぱちゃんはどこに行きたいかな?>Dくん「どうぶつえんにいきたい」I<そうか、かっぱちゃんは動物園に行きたいのか。動物が好きですか?>Dくん「うん!」I<じゃあ、このあと、動物園に行こう!みんなで、動物園に出発~!>

Eちゃんの場合) カゴを取ってカゴの中に部屋を再現している。公園のお花の鉢植えを部屋に飾っている。I<皆で何をしますか?>と尋ねられ、「おもちゃ!おもちゃであそぶ!」と言うが、その後、「おそとであそぶ」に変えて、皆で公園に行く設定にする。公園を再度再現し、家族人形を並べていた。

Fちゃんの場合) 家族でこれから何がしたいですか?と尋ねると、「テレビがみたい」という。皆でテレビをみることにする。I<何を見たいですか?>と尋ねると、番組名は答えられず、「10チャンネル」と答えていた。

結果のまとめ：各子どもの反応の全体的特徴

Aちゃん) 求められている状況が理解できず、親に援助を求め、不安を表した。ごっこ遊びはまだ困難な様子。ウォームアップで中断。

Bくん) ほとんど語りは出なかったが、演技がみられ、親との遊びの共有を求めた。ジュースがこぼれた場面で固まり、強い不安が示された。過去の失敗の想起かもしれない。「いやいや」にはまり、拒絶を繰り返し楽しんでた。人形遊びよりも小道具自体に興味が向いていた。

Cちゃん) 普段から人形遊びに親しんでおり、人形を通しての語り、豊富な言語的表現が可能。他者に対して本を読んだり、一緒に岩に登ろうとしたり、愛情表現や親子の交流の豊かさが感じられた。困難な場面では「難しい」と素直に困っていることを表現できた。自分で問題を解決しようとし、願望が妨げられても受け入れられた。ただし、まだ4歳前で他者視点取得が未発達なため、頭痛の母への共感が困難だった。

Dくん) 人形を通しての語り、一文のみだが言語表現が可能。親子人形への認識はあるが、親が制止してもやりたいことをするような、関係性の不安定な一面がみられた。Cちゃん同様、まだ他者視点で考える能力は未発達で、頭痛の母への共感が困難。親に注意されると、攻撃が直接暴力的に友人人形に向けられた。攻撃後笑うなど、感情の一貫性に欠ける。岩登りの場面で、落ちる、登れない、など、否定的な発言が序盤に見られ、自信のなさなどからくる防衛反応による攻撃性である可能性が示唆された。

Eちゃん) 人形を通しての語り、豊富な言語的表現が可能。父に温かいイスを用意したり、母の頭痛が治ると嬉しそうにしたり、親への愛情表現がみられた。一方で、友人や弟への制止・禁止が、他の表現と比較すると目立って多く、

日常的なきょうだい葛藤の存在と、姉としての役割意識の強さが感じられた。願望が妨げられても受け入れ、親の立場で考えることが可能。ポジティブな親子関係が表現されていた。

Fちゃん) 人形を通しての語りは、人形に読ませたり、演技をさせたり、と最も発達していた。しかしながら発話は一文が多かった。親子関係は肯定的で、願望が妨げられても受け入れ、母の立場で考え判断出来ていた。しかしながら、発話の内容がやや紋切り型で、常に母の顔色を見ながらの発言で、不安な様子も見られ、自発的な行動への自信の無さや、やや委縮している様子が特徴的であった。

考察

① 子どものナラティブは何歳位から可能になるか。また子どもの年齢によってどのような違いが見られるか。

本研究の結果、子どものナラティブは2歳9か月で可能であり、2歳前半では語りを伴う象徴遊びは難しいことが示された。C、Eのみに一文以上の語りがみられ、Fは5歳で最も年長ではあるが、人形に演じさせるなどの非言語表現の豊かさに比べると、比較的言葉数は少なかった。C、Eに共通しているのは、きょうだいの存在である。きょうだいがいると、自己主張のニーズから言語発達が促進されることは当然起こり得ることである。また、特にCは2歳台ではあるが、普段から人形遊びが好きな女兒で、人形を通してセリフを用いるのに慣れている。子どものナラティブは単純に年齢によってのみ違いが生じるとは言い切れず、きょうだいの存在や、ナラティブにつながる日常的な遊びの影響、というような環境要因の重要性を含むことが考えられる。一方で、人形を通じて発話させたり、人形が本を読んでいる、というようなアクションがみられたのは5歳のFだけであつ

た。表象遊びにおいて、より細やかな表現やリアリティの再現には年齢的な成熟という経験の積み重ねが必要となるのかもしれない。また、心の理論研究で有名な誤信念課題（Firth, Morton & Leslie, 1991）を用いた調査の結果、他者視点に立って考えられるようになるのがおよそ4歳以降とされているが、母の頭痛の課題で、母の立場で行動できたのがまさに4歳以降のE、Fであった。よって、共感性の発達の間程度についても識別できることが示された。

② 子どものナラティブに子どものどのような願望や心の葛藤、不安が投影されているか。

2歳児のB、Cには、親人形と一緒に何かをしたい、と親との共同での活動を求める内容が多く含まれていた。おそらく、まだ幼稚園等での集団生活が始まっておらず、家庭生活が中心であることが影響しているだろう。

Dのナラティブには、自信の無さや否定的な表現が見られた。また、親に注意されると、突然友人人形に攻撃するという、関係性の不安定さがもたらす行動が見られた。自分自身への否定的感情を受け入れられず、注意されたことによって、やつあたりのような攻撃が出現した可能性が考えられる。

また、Eに特徴的であったのが、友人や弟の行動への強烈な制止の表現であった。これはきょうだい葛藤の表れである。親の愛情を独占したい、親の期待に自分が応えたい、という強い気持ちがこのような表現に繋がったものと考えられる。

そして、Fについては、常に親の反応を気にするような様子が見られ、自分の行動に対する自信の無さや不安が表された。

③ 子どものナラティブを分析する方法として、今回我々が想定した方法はどれ程妥当か。

本研究では6名の幼児とその母親を対象に調査を実施した。年齢や成熟によるナラティブ表現の差異なども確認されたが、そ

れに加えて、きょうだいの有無や日常的な表象遊びの経験値なども結果に大きく影響する事が分かった。調査を実施するにあたって、家族構成や普段の遊びの様子などについても細やかな聞き取りが必要である。また、分析に用いるストーリーの設定自体は非常にシンプルであるにもかかわらず、子ども達からは、それぞれが日常的に抱えている願望・葛藤・不安が多様な形で表現された。したがって、本研究で用いた方法は、子どもの認知面での発達の様子を示す方法というだけではなく、親子の関係性や、きょうだいの在り様などに対する子どもの心情や日々の思いを遊びの中に出ささせ、子どもを囲む環境についても見つけ直す機会を提供し得ると言える。

本研究では、2歳児が3名、3歳児、4歳児、5歳児がそれぞれ1名ずつの計6名を対象に調査を実施した。3歳児以降の人数を増やすことや、各年齢での男女比較が可能な対象の確保が今後の課題である。

参考文献

- Emde, R.M., Wolf, D.P. & Oppenheim, D. (2003). *Revealing the Inner Worlds of Young Children: The MacArthur Story Stem Battery and Parent-Child Narratives*. New York: Oxford University Press.
- Firth, U., Morton, & Leslie, A.M. (1991). The cognitive basis of a biological disorder: autism. *Trends in Neuroscience*, 14, 433-438.

謝辞

調査にご協力下さったお子様方とお母様方、また、リサーチを支えて下さった中川潮音さん、中村真由美さん、古川恵理さん、堤信実さん、菅千春さん、リサーチに際してご協力いただきました神戸大学発達科学部、津田英二先生、そして、あ一ちの皆様にご心より御礼申し上げます。